

この子らを世の光に

Let These Children Be the Light of the World

第7回 糸賀一雄記念賞



近江学園近くの土手での写生会（昭和24年）

(財)糸賀一雄記念財団広報誌第7号

平成16年3月15日発行

CONTENTS

理事長あいさつ 2

選考経過説明 3

第7回糸賀一雄記念賞授賞式 4

第2回音楽祭フォトグラフ 6

受賞記念ワークショップ 8

「糸賀一雄とその時代」その5 10

発行 / 財団法人 糸賀一雄記念財団

〒520-3111 滋賀県甲賀郡石部町東寺四丁目1-1 TEL・FAX : 0748-77-0357 E-mail : itogamf@mx.biwa.ne.jp

戦後間もない荒廃した我が国の社会状況の中で、「近江学園」の創立に尽力されました故糸賀一雄氏の志を受け継ぎ、誰もが安心して暮らせる福祉社会の実現を目的に創設した「糸賀一雄記念賞」は、本年度で第七回目を迎えました。

糸賀先生の言葉に「ほんの一隅を照らす」というものがござります。「天下を照らすような大げさなスタンダードは到底できるものではないが、与えられた一隅をまじめに照らすことはできる。その一隅はどんなに小さな片隅であっても、そこを自らの全生命を傾けて照らし続けることを理想とすることは可能である。その実践が深く世界に通じ、歴史につながった生き方になると信じて」という意味のことをおっしゃっています。今回表彰させていただきますお二人の活動はまさにこの理念を着実に実践されているものであり、これまでのご努力とご功績に深く敬意を表する次第です。ところで、いま時代の大きな転換期にあつて、障害者福祉サービスにつきましても、昨年四月から、支援費制度への移行により、自己決定に基づく利用者本位の制度へ

財団法人 糸賀一雄記念財団 理事長 國松 善次

国内やアジア太平洋地域での 幅広い交流と情報発信、国際貢献を

転換しました。こうした中で滋賀県では、昨年六月に、「新・淡海障害者プラン」を策定し、「地域での自立生活の実現」を目標に、障害のある人が生活の様々な場面で能力を最大限に発揮し、地域社会の一員として社会参加できるための支援や環境づくりについて、一層の推進を図っていきたいと考えているところであります。

当財団といたしましては、これまでこの「糸賀一雄記念賞」を通して、人材の育成や奨励を進めてまいりましたが、今後は国内はもとよりアジア太平洋地域における幅広い交流と情報発信、国際貢献を行い、障害福祉の二十一世紀を切り開く活力の創出に寄与したいと考えております。

それだけに、この「糸賀一雄記念賞」が国内外を問わず障害のある方々の福祉の向上に向けて一層飛躍するためにも、ご臨席の皆さま方のさらなるご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。最後に、今回受賞されたお二人のご努力とご功績に重ねて敬意を表し、今後の一層のご活躍を祈念いたします。

Profile

國松 善次 くにまつ よしつぐ

滋賀県知事
昭和13年4月1日生まれ。滋賀県出身。
昭和34年4月大阪府入庁。退庁後、中央大学法学部へ入学。昭和51年4月滋賀県入庁。健康福祉部長、総務部長等を経て、平成10年7月、滋賀県知事に就任。趣味はサイクリング、旅行。座右の銘は「明るく楽しくたくましく」。



ごあいさつ

第七回糸賀一雄記念賞の受賞者を決定するため、昨年八月六日、県公館において、公務による二名の欠席を除く委員九名によって選考委員会を開催いたしました。

今回推薦がありましたのは、国外十三名、国内五名の計十八名の方々と、また、過去に推薦のあった方々も選考の対象にできるという本賞の規定により、前回までに推薦のあった方々についても合わせて選考を行った結果、外国籍を有する方、日本国籍を有する方、各一名の受賞者を決定いたしました。

その方々は、大韓民国の鄭徳煥（チョン・ドゥク・ホアン）さん（男性・五十七歳）と、北海道の近藤弘子さん（女性・五十八歳）です。

鄭徳煥さんは、学生時代の柔道練習中の事故により障害を持たれましたが、このハンディを乗り越えてエデンハウスを設立、韓国での障害者の就労や職業開発に取り組む、成果をあげられますとともに、障害者の働く喜びや自立、生きがいの創出に寄与されました。また韓国における障害者の福祉政策の向上にも精力的に提案さ

糸賀一雄記念賞 選考委員会 委員長 大谷 藤郎

本賞の趣旨に、もっとも ふさわしいお二人を受賞者に

れ、その実現に貢献されました。高齢障害者への福祉対策や地域コミュニティへの参加に向けた訓練施設の取り組みなど、今後も活躍が期待されます。

近藤弘子さんは、「北海道おしまコロニー」と呼ばれる最初の施設、おしま学園の開設に携わり、以来今日まで三十六年間、知的障害児者の福祉と教育の充実に懸命に打ち込んでこられ、現在、社会福祉法人侑愛会の総合施設長、おしま学園長として活躍しております。

障害児の地域療育、児童施設の生活環境改善や自閉症児者への、社会生活実現に向けた支援、体制づくり、また後期中等教育の充実等に成果をあげてこられました。

なかでも、強度の行動障害や自閉症に関する支援においては、国内外から高く評価されています。

地域生活・地域支援への知的障害者の対象拡大や、自閉症支援のシステム構築への取り組みにつきましても、今後のご活躍を期待されます。

お二人の今後ますますのご活躍を祈念いたします。

Profile

大谷 藤郎 おおたに ふじお

国際医療福祉大学総長
大正13年3月27日生まれ。滋賀県出身。
昭和27年京都大学医学部卒業。昭和34年厚生省入省。昭和58年医務局長を最後に退官。現在、高松宮記念ハンセン病資料館長、予防医学事業中央会理事長、長寿科学振興財団理事長を兼任。平成5年WHOレオン・ベルナル賞受賞。
趣味は絵画。座右の銘は「一隅を照らす」。



選考経過説明

私たち障害者が必要としているのは、 同情や手助けではなく、仕事と機会です

鄭 徳煥 氏

柔道の韓国代表チーム在籍時、練習中の事故により進行麻痺障害を持つ。障害者も社会の生産的構成員になれるとの信念から「エデン福祉センター（現エデン福祉財団）」を設立。試行錯誤の末、安定経営を行っている。

大韓民国 ●

鄭 徳煥 (チョン・ドク・ホワン) 氏
Mr. Jun Duk Hwan

エデン福祉財団理事長



私にとって「青信号」となった
「この子らを世の光に」という言葉

このような賞を賜りますことに感謝の意を述べる前に、まずは神に感謝したいと思えます。この賞は私の努力によつていただけるのでありません。神が進むべき道を示し、照らしてください、私はその道を歩んできただけなのです。

その道を辿るなかで受けた多くの人々からの啓示は、私に進むべき方向を示し、幾多の障害を克服するエネルギーさえ与えてくださいました。

その一人が糸賀一雄氏です。「この子らを世の光に」という言葉は、私のスローな歩みに対する「青信号」となり、私は常に前に進むことができました。私はスローな人間ですが、立ち止まっているわけではなく、無力でもありません。

かつて私は韓国を代表する柔道チームのメンバーで、私も金メダル獲得をいつも夢見ていました。しかし練習中に負傷し、頭以外の体の部分を動かせなくなりました。友人らの助けを借りて、ようやく少し動くことができる状態です。

それから、障害者に対する蔑みと偏見を常に受けるようになりました。ある暑い日、アスファルトが柔らかくなっていたため、車椅子が転倒し、私は道路に投げ出されてしまいました。また、疫病神だという理由で、門前払いを受けるようになりました。ちよつとした階段すら、立ちほだかる山のように感じました。大学を卒業するのに三十六年もかかり、卒業までのエピソードを数え上げたらきりがありません。

障害者の支援から投資へ
政策の変更を

現在、私は「エデンハウス」を経営しています。ここでは多くの重度障害者が働いています。私は自分の生活を営むことができる新しい機会と仕事を求めていましたが、

当時の社会にはありませんでした。そこで私は自分でそうした場所をつくらうと決めました。

エデンハウスではプラスチックのゴミ袋を生産しています。ここで私たちは働けながら、障害者のための「明日」を創っています。

全身麻痺になってしまったとき、一瞬にして多くのことが変わりました。しかし障害者の立場から何かを変えていくためには長い時間と根気が必要でした。

私たちが必要としているのは同情や手助けではありません。私たちは無力ではなく、スローなだけであつて正確にできないのではありません。

私たちは仕事と機会を必要としています。仕事と機会があれば、私たちは自分で自分の将来を築くことができます。障害者の支援から投資へと政策を変える必要があります。私たちは助けて欲しいとは思っていません。今、私たちが欲しいのはビジネスのパートナーなのです。

なぜなら、私たち障害者も二十一世紀を生きているのです。もちろん扶助金は私たちに与つて有り難いものでした。しかし、扶助金だけでは障害者を一般社会に復帰させる役には立ちません。さらに扶助金の最大の問題は、生まれながらの障害者に自分が置かれている状態は当然なのだと思うせいでしまうことです。私たちは皆、自分自身の生活を営んでいます。私たちはあらゆることを感じることができますし、考えることもできます。欲しいのはビジネスパートナーであつて、ヘルパーではありません。二十一世紀を共に生きている私たち障害者を、普通の市民として扱っていかねければなりません。その時が来ているのです。

私のスローな歩みのなかで、私は多くの友人に恵まれました。友人の一人は私を神へと導いてくれ、私の存在を教えてくださいました。いろいろな面でサポートしてくれる私の妻です。この場を借りて「愛しているよ」とつて

も愛しているよ」と言いたいです。

障害者はスローではあるが
働くことができる

この賞は私に更なる希望を与えてくれました。ご存知のように賞と一緒に多額の賞金があったからです。

糸賀一雄氏のように人生における道しるべのような方は、進むべき方向だけでなく目標まで教えてくださいます。この賞金は、途上国の障害者のために使つつもりです。途上国の障害者を招待し、立派に働く障害者をその目で実際にみてもらつつもりです。最初の一步は踏み出すのが難しく、おぼつかないものです。しかし、スローな歩みであつても、いつしか加速度がつき、希望に満ちた走りへと変わっていくと確信しています。

私たち障害者はスローではあるけれども真面目に努力する人間であり、仕事をする能力をもつた働くことができる存在であることをアジア太平洋地域の全ての国が、今後実感していくでしょう。

神に導かれ、私たちはその日を目指して前進します。晴れ渡つた素晴らしい日。そうした日がくることを願つて。神の御腕のなかでは私たちは皆、同じ人間であり平等なのです。

お招きいただいて、荣誉ある賞を賜り、ありがとうございます。皆さまに神のご加護がありますように。



國松理事長から、滋賀県の無形文化財「なるこ和紙」でつくられた賞状を受け取る鄭徳煥氏

糸賀一雄記念賞授賞式

平成十六年一月三十一日、ピアザ淡海「ピアザホール」で第七回糸賀一雄記念賞授賞式が行われました。受賞者お二人による喜びの声を届けます。

糸賀一雄記念賞

障害者の基本的な人権の尊重を基本に、生涯を通じて障害者福祉の向上に取り組んだ故糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、障害者やその家族が安心して生活することができる福祉社会の実現に寄与することを目的として、障害者福祉の分野で、顕著な活躍をする者に対して「糸賀一雄記念賞」を授与します。

人間としての限りない魅力と純粋さをもった方々に支えられて

このたび栄誉ある糸賀一雄記念賞をご授与いただきましたことを、滋賀県知事さまをはじめ、記念財団の皆さま、そして県民の皆さまに深く感謝を申し上げます。

お礼を申し上げなければならぬ多くの方がいらつやいます。

最初に、人間としての限りない魅力とその純粋さをもって、豊かな感性で未熟な私を今日まで支えてくださった、障害を持つ方々に、そしてそのご家族に深く感謝を申し上げます。

またこの賞にご推薦をいただきました川崎医療福祉大学学長岡田喜篤先生には大変ご迷惑をお掛けいたしました。ご推薦いただけるほどの実績も経歴もない人間をご推薦くださるのですから、きつとご苦労されたことと思います。

岡田先生ありがとうございました。

北海道に農業コロニーを創るといふ糸賀先生の夢の一部を形に

糸賀一雄先生の遺された「この子らを世の光に」の名言は私たちにとって、いつも座右の銘です。

遠い昔、糸賀先生はおしまコロニーに隣接するトラピスト男子修道院の丘に立ち、ここに農業コロニーを創る夢を持たれたと伺っています。その夢の一部を私も形

にしているのではないかと考える時、胸に熱いものが込み上げます。

おしまコロニーは昭和四十二年（一九六七）、児童施設おしま学園の施設福祉からスタートし、それを補完するように地域福祉が拡大してまいりました。この人たちに必要なものは制度がなくとも実践し、制度が後追いついてくるといった状況でした。昭和五十年代にスタートした早期発見・早期療育のためのトレーニングセンターや、母子療育、幼児のためのセミステイ、昭和六十年（一九八五）の地域療育センターは、今日では全国各地に当たり前のよう設置されていますが、児童施設の本業機能を逸脱しているとの批判も受けました。

早期療育の必要性は、むしろ成人期の取り組みからの反省に基づくものでした。

また昭和四十七年（一九七二）に命名された「コロニー」の呼称は、その後何度も改正について内部協議がなされました。しかし悪しきイメージにならず「手作りコロニー」を目指してきました。

いずれの時も障害のある方のニーズを先取りしてまいりましたが、厚生省、北海道などの行政関係機関の方々には本当にお世話になりました。改めて感謝を申し上げます。

これまでと同様

目の前の方々とのお会いを大切に

糸賀一雄記念賞受賞を契機に、取り組まなければならない自らの指針を考えました。

でもこれからもこれまで同様、目の前の方々とのお会いを大切にし、出会った者の責任を日々奢らず、焦らず、丁寧に果たしていきたいと存じます。

終わりにになりましたが、受賞を我がことのように喜んでくれたおしまコロニーの職員の方々、北海道の仲間たち、そしてこれまでご指導くださった多くの全国の皆さま、ありがとうございました。この賞は皆さんのものです。

会場に駆けつけてくださった理事長先生ご夫妻、ありがとうございました。賞金の使い道をそろそろ考えましょう。世界一周はしばらくおあずけにしたいと思います。本当にありがとうございました。



花束のプレゼンターとして登場した近江学園園生の福谷七菜実さんと近藤弘子氏

受賞者スピーチ

出合いを大切にし、出会った者の責任を日々奢らず、焦らず、丁寧に

近藤 弘子氏

知的障害者を支援する北海道おしまコロニー最初の施設「おしま学園」の開設準備に携わり、開設と同時に児童指導員となる。以来、障害児者の福祉と教育の充実にうちこみ、常に現場の第一線をリードしてきた。

北海道

近藤 弘子氏
Ms.Hiroko Kondo

社会福祉法人博爱会総合施設長・おしま学園長



回音楽祭フォトグラフ

も ない 人 さま

お祭りでした♪

文化会館
「第2回音楽祭」
ープにくわえ、世界
アで参加。障害のある
きとなりました。

●元気いっぱい！●

最初に登場したのは地元の「栗東少年少女合唱団」。小学1年生から高校生の皆さんが、第2回音楽祭入選曲「みんな友だち」（作詞：本田秀雄さん）などを元気いっぱい歌ってくれました。



●おかあさんの実力●

「女声コーラスWINDS」は、全日本おかあさんコーラス全国大会ひまわり賞受賞の実力派。第2回音楽祭入選曲「MY SWEET SUNSHINE」（作詞：市村恵史子さん）が印象的でした。



●混声の魅力が響く●

彦根最古の歴史がある「彦根混声合唱団」。第2回音楽祭入選曲「葦」（作詞：尾籠飄さん）など、混声ならではの魅力的なハーモニーが会場いっぱいに響きました。



●しましろう●

による大演奏。ステージと客
。「楽しかったね！」「また
ありがとうございました！」



●歌うことが好き！●



県内各地のグループや障害者施設などから集まったメンバーによる「糸賀一雄記念合唱団」。第1回音楽祭入選曲「人」（作詞：洞山象一さん）など、歌うことの楽しさが伝わってきました。

県内各地のメンバーによる「糸賀一雄記念楽団」。インプロビゼーショングループは森のイメージを即興で演奏し、アンサンブルグループはマリンバなどで「聖者の行進」を奏でました。

●叩くと楽しい！●



糸賀一雄記念賞 第2



世界の太鼓ソリスト林英哲さんと、「英哲風雲の会」の俊英・上田秀一郎さん、服部博之さんが打ち鳴らす太鼓はまさに圧巻。林さん自ら作曲の「石の鳥」などを演奏の後、滋賀県との縁などを語っていただきました。

●世界の林英哲さん登場！●



●和太鼓の“粋”●

地元・栗東市へそ集落の「和太鼓集団雷太鼓」と、栗東市を中心に集まった「和太鼓グループTAO」。「雷神」「虹」など、和太鼓の“粋”が感じられました。



●来年もお会い

フィナーレは出演者総勢250名以上席が一体となって盛り上がりました。「がんばろうね！」そして「皆さん、



あ る 人
の
音
を
楽
し
ん
だ
み
ん
な
で
音
を
楽
し
ん
だ
平成16年2月1日、栗東芸術
さきら大ホールで「糸賀一雄記念賞
が開かれました。県内から参加のグル
的な和太鼓奏者の林英哲さんもボランティア
人もない人も、ともに楽しみ響き合うひと

第1部

障害者の就労を通しての 自立と社会参加

授賞式に引き続き行われたワークショップ第1部では、韓国と日本での障害者就労の現状や展望などが報告されました。

出席者

鄭 徳煥(チョン・ドク・ホワン)氏
(エデン福祉財団理事長)

岡本 幸助 氏
(情報共同作業所アイ・コラボレーション代表)

高橋 信二 氏
(社団法人滋賀県社会就労事業振興センター長)

座 長
河副 健一 氏
(にっこり作業所所長)

機会さえあれば、すべての障害者が 社会の生産的な構成員になれる

鄭 徳煥 氏

鄭徳煥氏は「障害者の就労を通しての自立と社会参加」と題して講演。差別と偏見が根強いなか一九八三年に設立した韓国初の職業リハビリ施設について、「従来の『保護』を重点においた福祉センターとくらべて画期的でした。障害者の職業コミュニティの役目を果たし、実際に生産活動に参加させ給与を払っていたからです」と述べ、「当初の電機部品製造の下請けから、一九八九年、廃棄物回収料金システムのためのゴミ袋の生産に切り替えました。現在、『エデンハウス』では、八十六名の重度障害者が、ゴミ袋の生産に参加しています」と紹介しました。

また、福祉政策については、「流通過程で生じる無駄を省くための法改正や、政府と地方自治体の障害者生産物購入

を義務化するという法改正、軽度障害者だけでなく重度障害者もより容易に職につけるような法改正を、政府に対して強く進言してきました」と、改善のための努力と成果を語りました。

今後の展望として、「市場の変化に適応し、収益性のある事業を発展させ維持していくため、アニメーションや放送の機器など高付加価値商品の開発」をあげ、また「障害者が完全に社会参加するためには、施設中心から地域社会中心への移行が必要」と述べました。

国際協力として、北朝鮮の障害者に車椅子を千台送る計画を進めていることを明らかにし、「アジア太平洋地域の発展途上国とも、情報を交換・共有するために努力を続けていきたい」と締めくくりました。

続いて河副健一氏の進行により日韓交流の事例が紹介され、高橋信二氏から県内の作業所の経緯が語られた後、現状と今後の展望に移りました。

「受ける側」ではなく
「する側」としての作業所に

高橋 鄭さんのお話にもありましたが、作業所の活動を地域の経済活動に組み込んでいく必要があります。そして、雇用の確保と所得保障を勝ち取り、地域での希望する生活スタイルの実現を目指したいと思っています。

「滋賀県社会就労事業振興センター」では、福祉的就労を一般就労に近づけていくため、ITや、高齢者福祉、農業、環境といった切り口で、さまざまな事業を起こして、働く中身の具体化をはかっています。

事業紹介をしますと、環境では、琵琶湖のヨシが原材料のレイクパピルスを使った名刺の生産・印刷。農業では、環境

こだわり農家とタイアップ。介護では、知的障害の方に三級ホームヘルパー資格を取得のうえ働いてもらう



第1部座長を務めた河副健一氏は「鄭さんは、日本と共通する問題点を先駆的に取り組んでおられる」と語りました。

O法人の活動をしています。ITについては岡本さんからお願います。

岡本 「情報共同作業所アイ・コラボレーション」の合言葉は「サイバースペースにバリアはない」。現在、滋賀県ほか近畿七ヶ所の仲間と仕事をしています。特徴としては、コンピュータを利用した在宅勤務だということと、事業所型ということ。当初集まった十二名については、最低賃金の時給七百円、月給十万円を目標にしました。三年目でほぼ達成して、それ以上の方もおられます。

これからは、ボランティアの方は「する側」、作業所は「受ける側」という構図を、ITによって逆にしていきたい。最近では、ときどき地域の方が「教えていただけませんか」と来られるようになってきています。滋賀県での障害者法定雇用率は二パーセント程度なのですが、そうした義務的雇用ではなく、能力を重視した雇用にもっていききたい。能力はあるのです。ただ能率は悪い。それをサポートするのが行政の仕事だと思っています。

それから「あり方検討委員会」などでも、障害者自身が企画やアイデアを出すというように積極的に取り組んでいくことが必要ではないでしょうか。

河副 私も授産施設を運営していますが、もっとグローバルにネットワークを広げて、経済的自立を支援していきたいと思っています。



左から、岡本幸助氏、高橋信二氏。右端が鄭徳煥氏

自閉症支援の ネットワーク

第2部では、北海道と滋賀県での「自閉症支援のネットワーク」について語られました。

出席者

近藤 弘子氏

(社会福祉法人有愛会総合施設長・おしま学園長)

井深 允子氏

(滋賀県自閉症・発達障害支援センターいぶき主任)

座長

口分田政夫氏

(第一びわこ学園園長)

世界中の障害児者が自己実現できるよう 出会った者の責任を

近藤 弘子 氏

近藤弘子氏は、おしま学園の歴史を振り返り、自閉症児との初めての出会いにふれ、「行動のすべての要因をご本人に押しつけて、出会った者の責任をまったく果たさなかったのではない」という深い反省、自戒の念がこんにちでもまだ残っています」と述べた。

支援については、「本来、幼少期から一貫して行われるべき」とし、「最近では、ご家族の意識が大変高くなって、自分の子どもさんの進路先の候補の機関が、今まで受けた内容をきちんと継承してくれるかどうか見きわめたいうえで選択されています」と、重要な変化がおきていることを指摘しました。

そして、おしまこころ創設者大場茂俊氏の遺した「創業は難し、守成はなお難し」、「初心忘るべからず」、「この

人たちがこそ我が師」の言葉を紹介。

「職員はいかに未熟か、常に自らに問いなさい。先生と呼ばれる資格はむしろ、目の前の障害を負った人たちであり、この人たちから教えを請いなさい。施設創設は確かに生みの苦しみであった。しかし事業が拡大した今、これらを育て、向上させていくことは、さらに難しいことである。時代のニーズを受け止め、何をしなければならぬのか、選択実行する眼を持ちなさい」と述べた大場氏について、「糸賀先生の

『この子らを世の光に』の精神に自らの人生を尽くしきった方であったと思います」と話し、これからも「世界中の障害児者が自己実現できるよう、出会った者の責任を果たしていきたい」と語りました。

続いて口分田政夫氏の進行により、井深允子氏から「滋賀県自閉症・発達障害支援センターいぶき」での取り組みの報告があり、今後の課題を語りました。

障害を理解され 地域で生涯にわたる支援を

井深 この一年間いろいろ活動してきました、いぶきに何を期待されているのか、相談を支援し、療育支援をしながら、あるいは学校や就労現場に行きながら、コンサルテーションを通して自閉症児者の方、家族の方、支援者が何を必要としているのかを見聞きしてまいりました。今の時点では、次のように考えています。

四つの視点を大切にしたいと思っています。第一は、滋賀の福祉の特徴を活かすこと

です。七つの福祉圏域にある生活支援センター、そして幼児期の早期療育を担っている十七ヶ所の地域療育教室など、滋賀県には組織的な展開をしている事業がたくさんあります。それを活かしていこうと思っています。

二番目は、自閉症の理解を基本にしたいと思っています。第三は、自閉症の人と家族を中心に据えておきたいと思っています。第



第2部座長を務めた口分田政夫氏は「糸賀先生が夢見られた地での高レベルの実践に感動しました」と語りました。

みをつくっていくということです。

この四つの理念を実現していくとき、いぶきの果たすべき機能はどういうものか、二つ主なものを挙げたいと思います。一応イメージしたのですが、その一は、自閉症の人と家族が生活する地域の、一次・二次機関による日常的な支援が充実するためのコンサルテーション機能を持つことです。今年もかなりいろいろなところに出かけてまいりました。これは、私たちにとってもとても勉強になりました。

その二は、福祉圏域を越えて、より専門的な支援機能を持つ三次機関が、一次・二次の機関と有機的なつながりを持つていけるようにすることです。そしてまた、三次機関を有効に活用していくためのコーディネート機能を我々は発揮していきたいと思っています。

この二つの機能を中心に持ちながら、自閉症の人が地域で、そして自閉症という障害を理解されて、生涯にわたる支援が滋賀県のどこでも受けられる仕組みを関係機関と協力してつくるのが、我々の課題だと思っています。

口分田 自閉症の方はそのままの力で、あらゆる生活の場で、そういった関係をともにつくり出していくことが、今後のネットワークの課題だと思いました。北海道とも交流しながら自閉症支援の質の向上に努めていきたいと思っています。



左から、井深允子氏、ひとりおいて近藤弘子氏

糸賀一雄の遺した名言

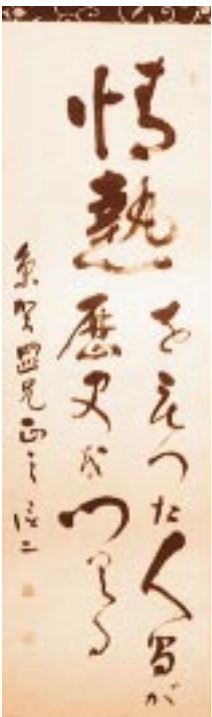
社会福祉法人大木会理事長 三浦 了

昔から名言とか至言とかよくいわれるが、一体何をもちつて「名言」とするのか、また誰がそれを名言と決めるのかそれはわからないが、一般には「すぐれてよいことば」とか、「有名なことば」とされている。

そこで、糸賀先生の言われたことばや書かれたものの中に、私が「実にすぐれてよいことば」と思っていることばがいくつもある。今回はその中からいくつかを紹介することにしよう。

ただ、「すぐれてよいことば」だけを、つまり格言のようなものだけをここで紹介しても十分な紹介にならないので、つまりそのことばが出てきた糸賀先生のものの方や考え方、生き方、その実践の足跡こそが大切なので、それを裏付けるような糸賀先生の一文を解説的な意味も含めて引用することにする。

つまり名言だけがすばらしいのではなく、そのことばとして出てきた背景にある思想や、どう生きてきたかということこそが大切なのである。私がいつもこれらの「ことば」に触れる時に感じることは、これらの思想の裏に西田（幾太郎）哲学が、木村（素衛）哲学が垣間見えてくることである。糸賀先生と木村素衛先生との関係は、前回のこの欄で紹介したところだが、



国鉄総裁だった十河信二氏による揮毫

その木村先生は西田先生の愛弟子でもあり、糸賀思想の各所に西田・木村の考え方がにじみ出ていることも何かうなずけるように思う。

戦前、滋賀県庁に勤務する時も、戦後近江学園を経営するようになってからも、公私いずれの時、いずれの場所にあっても、亡くなるその日まで常に一貫していた糸賀先生の生き方は「情熱の人」そのものであった。

糸賀先生は、かつて国鉄の総裁であった十河信二氏から揮毫をいただいたことがある。「情熱をもった人間が歴史をつくる」とあった。

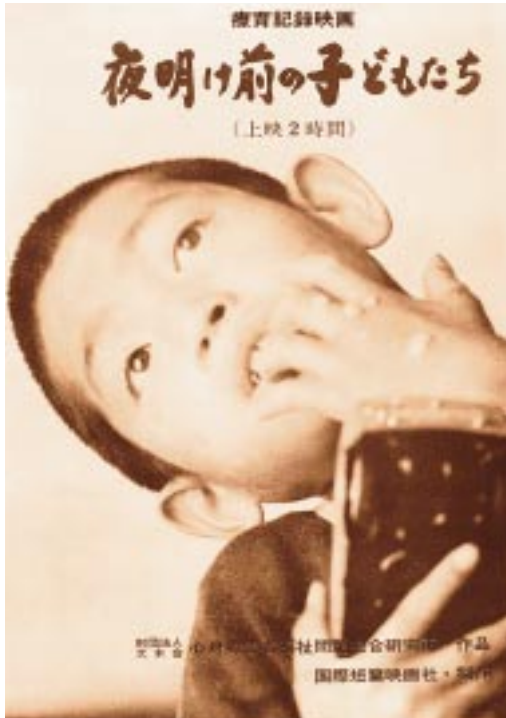
その一「この子らを世の光に」

「…人間と生まれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということ、認めあえる社会をつくらうということである。『この子らに世の光を』あててやるうというあわれみの政策を求めているのではなく、この子らが自ら輝く素材そのものであるから、いよいよみがきをかけて輝かそうというのである。『この子らを世の光に』である。この子らが、生まれながらに持っている人格発達の権利を徹底的に保障せねばならぬということなのである。…」註

その二「自覚者は責任者である」

「…私たちはこの人びとを『精神薄弱者』（註）と呼び、ある時は『心身障害者』と呼んでいる。そしてその出現率は3パーセントぐらいであるうといっている。しかしこの3パーセントのなかにいれられた人びと（本人やその家族）にとっては、その出現の頻度は100パーセントの現実である。…」（3パーセントを「いや100パーセントなのだ」と自覚した人こそ社会に対しての責任者でもあるのだ、と。）註

（また、重症心身障害児の療育記録映画「夜明け前の子どもたち」の鑑賞会の後の講演で）「…この映画をご覧くださいますと子ども



療育記録映画「夜明け前の子どもたち」
パンフレット 1968年3月

もたちとの共感の世界を味わってくださいました皆さまがたが、
こういつ世界に対する自覚者になっていただきたいと思うわけで
ございます。自覚者になる。こういつ世界のことを覚る。自覚す
る。しかし、自覚するということとは責任を負うということござ
います。日本の国に本当に輝きがまいますように、世界が本当に
平和と喜びに満ちますように、自覚者が責任を持ちます。」註

その三「国宝とは人材なり
人材とは一隅を照らすものなり」

「比叡山の客間に『論湿寒貧』という扁額が掛けてあった。論
は論議のこと、その昔仏教の本義についての激しい研究と勉
強が山の特色であったことを指しており、湿と寒はよんで字の
ごとくであり、貧はその上に世俗の物欲はわれ閑せざるもの、
年中貧乏がその実態であったという修業のきびしさをいったも
のであるという。

千二百年も昔、伝教大師がこの山にわけ入って開山のためにど
んな苦勞をされたかは、想像に絶するものがある。生死を超え
た真の自由人でなければなしえないことであつたと思つ。爾來千

年の法燈をついだこの山は、仏教の道場として、大学として、法
然をつみ、親鸞をうんだ。日蓮、道元もみなこの門に学んだ。短
くて十二年、長くて二十年の修業であつた。伝教大師は「人材こ
そ国宝だ」と喝破して、その養成に力を注がれた。そして人材を
定義して「一隅を照らすもの」だとされた。思えば意味が深い。
私たちはとても天下を照らすなど思いもよらぬ一介の庶民でしか
ないが、自分の属している家や仕事のほんの一隅を照らしつづけ
ることはできそうである。そこに希望があり、勇気がわいてくる。
どんな障害をもっている人でも、その人の全存在で、それなりの
一隅を照らすのである。」註

その四「育てるのでなく、誰しもが
自ら育つ力をもっている」

「『育』というものは、教育とか、保育とか、単なる保護では
なく、こういつ重症な子どもたちは『自ら育つ』という自動詞
がある、ということをわれわれ世話をする方が教わつたのです。
自分が自分で人間になっていくという営みの中『育つ』という
自動詞なのです。だから『育てる』ことができるんだという他
動詞と、さっきの自動詞が『育』ということの中身なのです。か
ら、私たちの本当の希望は、この子を育てたら立派になるとい
うのではなく、むしろこの子自身が育つ力をもっているから
育てさせてもらうことができるというこの現実です。それが教
育的現実というものです。」註

註 『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会 一九八三 一一二頁
現在使わない用語ではあるが歴史的資料を尊重し敢えてそのままを
使った。

註 『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会 一九八三 四六〇―四七頁

註 『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会 一九八三 二九六―二九七頁

註 『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会 一九八三 二七五頁

これは「比叡山延暦寺の開祖である伝教大師最澄のことは」だとされ
ているが、糸賀先生はこのことが大へんお好きで自分の生きる指針
ともされていたように思うので敢えてここに挙げることにした。

註 『糸賀一雄著作集』日本放送出版協会 一九八三 三七九頁

第8回 糸賀一雄記念賞の募集について

生涯を通じて障害者福祉の向上に取り組まれた故糸賀一雄氏の心を受け継ぎ、障害者やその家族が安心して生活することができる福祉社会の実現に寄与することを目的として、多年にわたり障害者福祉の分野で顕著な活躍をされている人に対して「糸賀一雄記念賞」を授与するものです。

実施団体

財団法人 糸賀一雄記念財団

記念賞の内容

【候補者の対象、資格】

日本、東アジア地域、東南アジア及び西太平洋地域（ただし、オーストラリア及びニュージーランドを除く）に居住し、障害者福祉に関する活動実績が高く評価されており、かつ、今後の一層の活躍が期待される個人とします。

【授賞】

- ・ 2名以内とします。
- ・ 1名につき賞状及び賞金200万円を授与します。

応募方法

- ・ 所定の「第8回糸賀一雄記念賞候補者推薦書」に記入（日本語または英語に限る）し、第三者により応募してください。他薦とします。
- ・ 郵送による応募の場合は、締切日必着とします。
- ・ 以前の候補者で受賞外となった人の再応募を妨げません。

選考方法

受賞者は、推薦のあった応募者（前3回までの応募者を含む）の中から選考委員会が選考し、理事会の議決を得て決定します。

授賞式

授賞式は、平成16年秋以降に行う予定です。

推薦書の送付及び問い合わせ先

財団法人 糸賀一雄記念財団
〒520-3111 滋賀県甲賀郡石部町東寺四丁目1番1号
県立近江学園内
TEL・FAX 0748-77-0357
E-mail : itogamf@mx.biwa.ne.jp

選考委員会委員

委員長	大谷 藤郎	国際医療福祉大学総長 (財)糸賀一雄記念財団副理事長
委員	江草 安彦	(財)日本知的障害者福祉協会顧問 (社福)旭川荘理事長 川崎医療福祉大学名誉学長
"	北浦 雅子	(社福)全国重症心身障害児(者)を守る会会長
"	京極 高宣	日本社会事業大学学長
"	鈴木 健二	青森県立図書館長 青森県近代文学館長 青森県文化アドバイザー
"	徳川 輝尚	全国身体障害者施設協議会会長
"	福田 雅子	ジャーナリスト
"	野地 芳雄	(財)全国精神障害者家族会連合会常務理事
"	松尾 武昌	(社福)全国社会福祉協議会常務理事
"	沼田・ヒューゲル	国連アジア太平洋経済社会委員会社会開発部障害統合課長
"	安藤よし子	滋賀県副知事

募集期間：平成16年2月1日～平成16年5月31日